

先進繡像玉石雜誌

高



先進備像玉不雜誌卷之二目錄

萬里小路中納言藤房卿真像 并傳

延文弟三年遁倫隱士秋 嘉元三年十歳の時乃詩 夕即貫首

小田氏畧系 関東八将 不二房四跡 鷹巢山乃菴室

妙心寺二世授翁宗弼 仇山子 屢乃鏡と云名番

下野長光寺古鏡古錢

吉田内大臣定房公真影 并傳

吉部秘訓抄 吉續紀 後嵯峨院乃後皇統西流ふれ事

持明院教 大覺寺教 後醍醐天皇乃皇太子乃御事

長講堂領 吉田亭行幸乃圖 節分乃御方違

定房云子息并姫系



菊池次郎武時入道寂阿真像并傳

御封戸 領家 下司殿 少貳氏 大友氏

鎮西探題 榊田宮乃麟 母衣

大坪左京亮有成入道道禪真容并贊及傳

雙合文 鑄錢坊并鑄錢次八道禪坊及道禪次と云

鞍鐙規矩相承乃々々 大坪式部大輔慶秀

大坪亥三郎吉利 道禪乃鞍

頓阿法師壽像并傳

梶井乃芝 執當職 小野宮大納云能實卿

梶井別當忠頼 大納云為世卿高野山花折院

住みひくと 同卿薨御乃と 愚問賢注

新拾遺集撰進乃と 四天王探題云首欽誦

靈山正法寺 雙林寺乃墓 蔡花園

頓阿法師子息 柴屋寺尺八 老人尺八

林鐘簫 呂才尺八十二管

萬里小路中納言藤房卿真像 集古十種原本



三ノ一

萬里小路藤房卿真蹟 太平記圖會所載

延文才三磨乃多基下旬天凶崇之
 道風塵未和軍率之重務治深矣
 聖お蝸牛之角約命於塔之
 一夕之僧支之悲徵仙教之減期
 考の西隣治之為經始煙霞所
 根東嶺拜神而樂利物多端之
 擢系宮之中次然之餘述二角之
 甲懷表一心之中瞬而已

通倫隱士

雲にうしりておきてしる
 とりいす海々み祿乃の海
 歸ふへたあし地乃の雲海
 都ふとれけり此石

延文三年ハ藤房卿六十二歳花園ちかに在り関山せきざん惠玄ゑげん不隨ふじゆ小
 此文意を考ふるこのぶんい寺門ていもん之表のひら綴ひ二井寺ふいせいを云西隣せいりん跡あと舊
 云く 二井ふいの西にしあり 東嶺とうりやう拜神らいじん云々 二井寺ふいせい新羅しんらと云必是かならず二井
 寺衆徒乃ていしゆどう隱倫いんりんかふへり 藤房卿ふとうけい北朝きたう乃延文のんぶん乃稱のんしやう
 と用ひて入いれ登のぼりて 正平せいへい十三年じゅうさんねんと有あへり

萬里ばんり小せう路ろ中ちゆう行かう云藤房卿ふとうけいハ吉田きちだ大貳だいじ資し徑けい卿けいの孫そん柱ちゆう大だい行かう
 云宣房せんぼう卿けいの二男になん永仁えいじん四年しよんねん丙申ひのえさるのしう歳さい誕生たんじゆうありと云々 惟房いひぼう
 赤元かか三年しよんねん十歳じゆさいふりて 春來はるきた品物ひんぶつ都春みやこはる容よう本ほん母はは花はな開ひらく香かう正濃せいりゆう
 今日けふ太平たいへい三朝さんちゆう恩家おんか之の醉賞さいしやう更さら飛鐘ひでかねと云詩うたを賦ふ後のち二条ふたじょう
 院いんふ奉ほうら持もちけり子こ叡えい感かん淺せんうりて 以もつ推おし者もの乃のち後のちく学がく問もん
 勉つとめ等おなを困くるあらけり博覽はくらんの同どう等どう倫りん子こ秀ひで給たまへりふより 文保ぶんぽう二
 年ねん三月さんげつ廿九にじゆうきゅう日ひ年ねん廿にじふふく先坊せんぼう大進だいしん資し乃のち替か子こ五ご位い
 義人ぎじん子こ補おぎなをら也 職原しやくげん鈔しやう了りやう五ご位い藏人ざうじん三人さんにん名家めいけ譜ふ代だい殊しゆ撰せん
 云々 其その器き用もち所ところ補おぎな也なりと云唐たう名な仙せん即すなはち或ある夕ゆふ即すなはち也なり
 兼元かねもと亨かう三年さんねん正月しげつ廿八にじはち歳さいふりて
 任にんままと云里り 中宮ちゆうぐう亮りやう兼かね元亨げんかう三年さんねん正月しげつ廿八にじはち歳さいふりて

藏人頭とあり の職古来重職と云 藏人頭を死す即斃命と云 藏人の中清撰
了あくさく 職原初ふ見也 正中元年四月参議小任一 同三年二月推
中納言を轉任乃時片上座三人 正二位定平惟繼源親
を越さ勢あ入元弘元年八月廿二日 皇上天皇 後醍醐天皇
裏へ出御ありし 笠置乃窟へ遷幸す 尚 姑く東夷の
暴虐を避させし 時以郷智謀ふ 中宿乃於終
北山教へ終啓乃す ありし 所門守護の
武士を欺りし とき其九月河内國乃任人楠正成を笠
置乃窟居へめさせ終り 以郷なり 十月三日笠置城軍攻
也 二日大和國多賀縣有王山乃藤と潜幸ありし 際
以郷隨ひし 勢て

いふとんたの心教とく 立よ也 及於神ぬらと松乃
下高と詠き 一世あす 孫く 永高なり 十二日六波羅不還
幸あり 幸りて 及以郷を 武勇 尤進 幸あり 相摸入
乃宿所子 止あり 並子種 忠顯朝臣と 共く 之より 降す 以郷
たり けかり 同二年三月七日 之と 隱岐國へ 遷幸ありし
後 小田氏 辨大輔 高知 系國り 八田右衛門尉 知家 女八
原氏 了政 沁る 云と 實 下野 推守 宗朝 子と 云を 以郷
有幕下 頼朝 卿 崇教 大 その子 宗朝 其子 貞宗 其の子 永
其の子 泰知 其の子 時知 其の子 宗知 其の子 貞宗 其の子 永
其の子 高知 其の子 高知 其の子 曾孫 持家 其の子 結城 以郷 其
那須 守都 宮八 家 を 園 東 八 將 と 定 め ら せ け け 以郷 其
志 あり 常陸 國 了 下 向 小田 城 了 同 二年 五月 乙 辰 美
ら 勢 け かり 京 鎌倉 一時 滅亡 了 之と 都へ 還幸 ありし

けさ付教房卿由常陸國より上洛ありて又月十七日本
乃如く正二位中納言云々かききぬハ權中納言源通久卿
の左衛門督使檢非連使別當たりしと權中納言經顯卿の右
衛門督たりしを止めらむとて此卿を右衛門督使別當ふ
補きりてしを笠置供奉乃忠を賞せらむとてふふへしハ
くく建武元年宿軍勲功の賞以て授けりて此卿も恩賞
方番文之書安午戌日畿内山陰山陽西逸の別當ありて熱氣の
沙汰を致さむんとすれハ女謁内奏りさぬけりて
中興乃帝業真猶乃利とて願ふふんとす此を傷む内々
諷諫をせらむと云とよ良薬たり苦く忠云清母逆
いあむ月十一日石橋水引幸乃ありけるよしあれそ

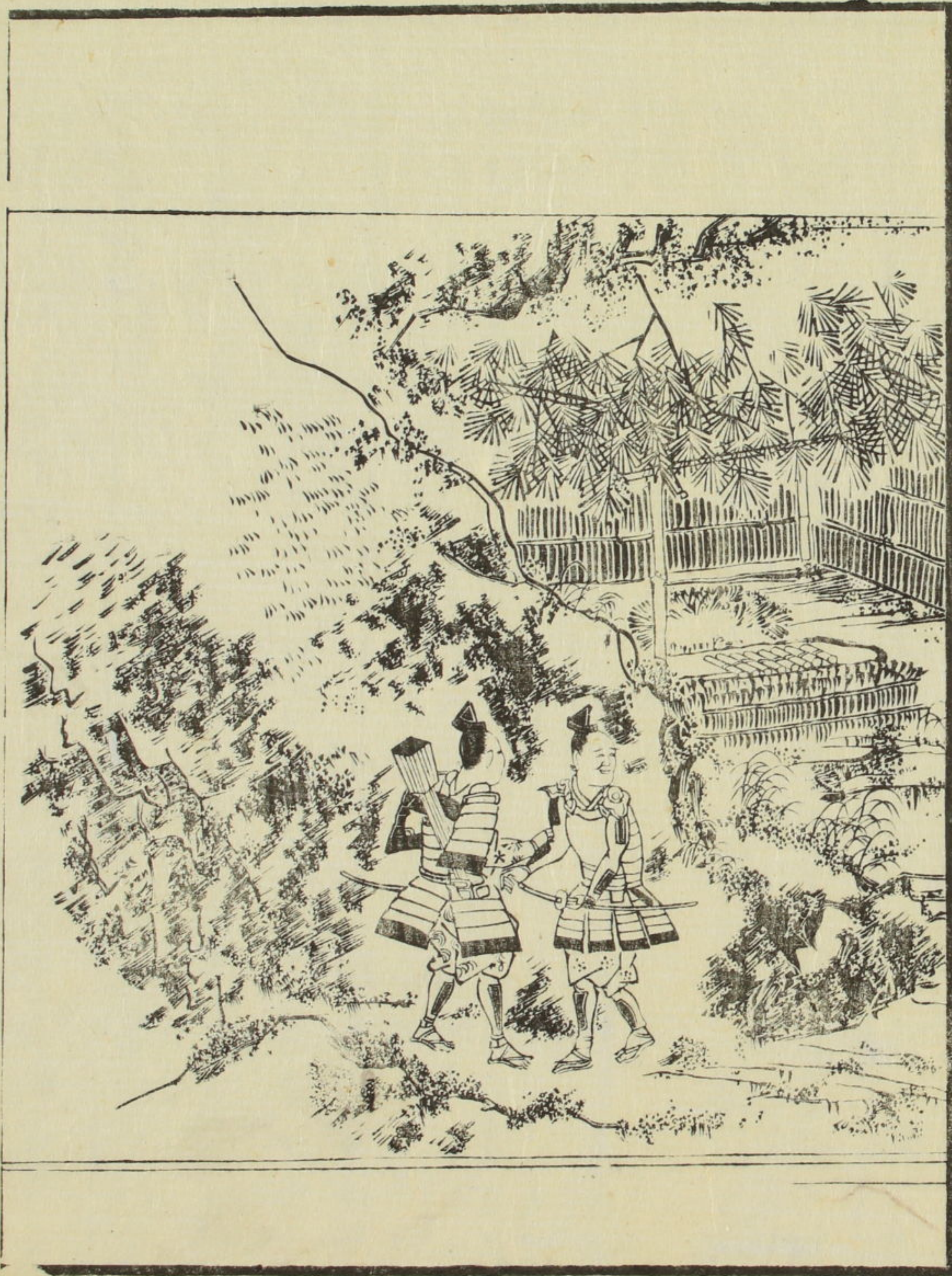
最後乃供奉と云れりし時乃大埋ふく花やりよ
裝束一々清供せらむ還幸の後十四日ハ致仕乃後就顔
る辺りきまかこり部ハ所屬けむは流不流名孫のありて
に系門一十六日未雨り退出し北岩倉と云ふるて不二
房と云僧を戒師とて多年拜趨の儒冠を解く十戒持
律乃法體大成五ひけり以年二十九
まを捨ふふをりし世乃人ハはく此命をたすかへん
棄恩入毫為去安報恩者 白頭望以万重ハ 曠劫恩
波盡底乾 不是胸中花五逆 出家端的報親難
と破るは障子のより書孫ハハ誅玉修乃乃ためりて
足ふすり抄く出あひけり

公卿補任太平記南朝紀傳建武
記等ふよ此本平記金鹿院中ふ

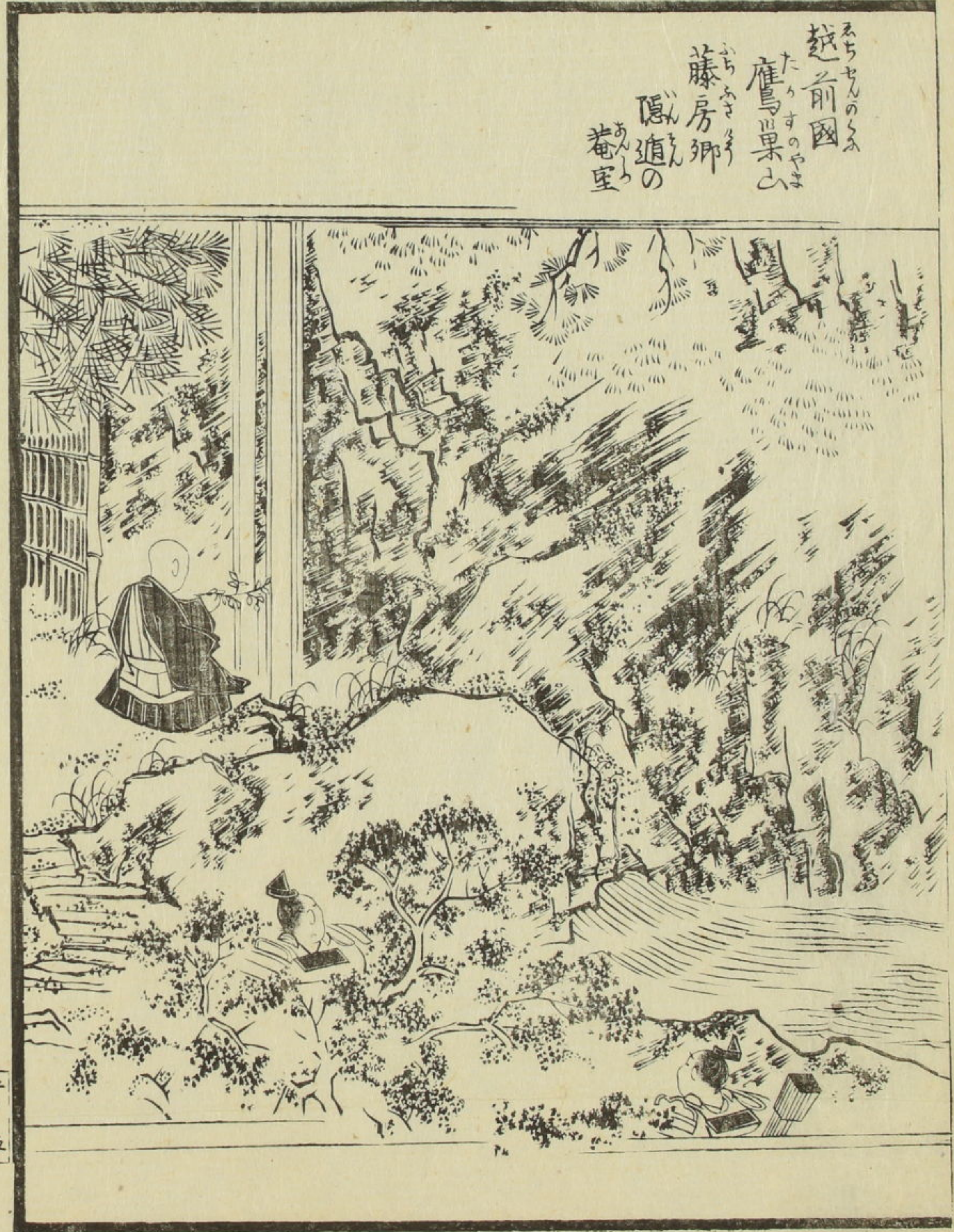
不^二房^一仁成と有り[〓]山城谷勝志[〓]北[〓]岩倉大[〓]野寺東[〓]
了[〓]福[〓]泉寺[〓]の[〓]東[〓]子[〓]不[〓]二[〓]房[〓]の[〓]舊[〓]跡[〓]あり[〓]
又[〓]寛[〓]政[〓]二[〓]年[〓]之[〓]月[〓]樹[〓]下[〓]菴[〓]祖[〓]方[〓]と[〓]云[〓]者[〓]大[〓]野[〓]寺[〓]觀[〓]音[〓]堂[〓]
不[〓]二[〓]房[〓]仁[〓]成[〓]の[〓]刻[〓]一[〓]町[〓]評[〓]林[〓]中[〓]に[〓]説[〓]五[〓]尺[〓]余[〓]の[〓]石[〓]塔[〓]を[〓]立[〓]て[〓]
不[〓]二[〓]房[〓]仁[〓]成[〓]の[〓]刻[〓]一[〓]町[〓]評[〓]林[〓]中[〓]に[〓]説[〓]五[〓]尺[〓]余[〓]の[〓]石[〓]塔[〓]を[〓]立[〓]て[〓]

吉野拾遺小刑部卿義助朝臣乃越前守乃おくりて物語
一紙系因鷹巢山はさくそなまはま城郷に絶ふへ一系
たりを是は細六郎九衛門尉時能と云ふ不守ら惣けか
小業内を知らんころより於奥深く分入しけり谷川の言
はく流はあまを源をるるをけりしきし出する岩
をひきりて松乃葉ふく草は庭のまをけるをひき
折ふは伝人乃ありけりよやと云ふくも伝は本葉を
集く是く一平なる石乃と云う法華經を並けか外ふハ

何れもえん人志も有りけり山河をたよりを教人を
之は及瘦衰たる傍乃極をまて持しりありありやと
おのろれよりけり谷川乃水を結ひて庭の内ふ入
て短乃短をとき母かると子後娘あまを先ふと名を
ゆくとけり伝伝伝あまいと貴く荒いへいり形か人の世を
そむいぬあまひけるふやと問ふあまは持あまはいふと
させける後子衣衆をけり是はいと平素をか扱て東
乃考よあまとく有り室ひく短を續給ひ一程よかへり
侍らへ着居乃乃面敷く侍かといふまはにいと
拵くく一系少将を侍ひてありけり菴は其の傍
有く傍いへんまは短乃有りか石と問ふ



越前國
鷹巣山
藤房卿
隱道の
菴室



あつちよと浮世乃人の間くれハ空の事子宿求めん
と書付玉へ教養乃流を少拍の能く知ふひくく
ふくを尋せむひけむたよりく玉を糸の最本意
ふくてと宮へ一人と夢もあなれとく皆涙を流し
太平記南朝紀傳等了依く考く教了義助興國
てたり二年九月十八日義濃國根尾城を落く伊勢路
を經く新野原裏へ氣らゆ中を記し細時能く鷹巢
城了居て尾張守高経と戦ひく興國元年の事と以
此以居の僧益房卿あらん
又同一頃大納言實世卿乃河津へ童の帝文とく其
く教をうく海と傳けはは

表のすむ宿乃つらりをきてこれの昔よりぬり以異深乃神
流すもさかろ昔よりぬを哀と驚くを流くく中

使乃童を女よとく同を流へ此ハ今朝西船が船子お
て系を刈とふろ瘦衰たふ修約者乃以文居けくよと
作ひひくと云よ多き皇居へ系りよく大和紀伊は行
門関く了詔く修約者を止めく流ともこれと云くく
あつちよとけり中納言益房入道乃清中く有けり
相國乃長子南朝小柄候く左大長小任流ひ延文二
年八月十九日薨せり中系圖了足持也後房卿
六十二歳の
時よあつちよ
妙心寺六祖傳云天授授翁宗弼禅師嗣關山姓藤氏勸
修寺大臣家花族也云云康暦二年三月十八日遷化世
壽八十五閻維収設利建塔於正法山西頭名曰天授院
康暦二年ハ南朝天授六年不て教房卿八十歳あり
天授院と云ハ南朝の年号也是は教房卿の教房卿たる

正平十一年六月十一日
或云後房卿况山子と辨し雙丘乃東不池尾乃松菴
了より海より花園乃岡山國師子義祿せり也
日國師裝束より笠を戴き侃山子を呼お掛り水求
乃頭より松樹より依り出世乃松末を立候し身て泊
然として化去侃山子遽に一危了告く丈室より昇入全
身を本心の良隅に瘞り塔を建く微笑庵と名付し
云岡山國師の法嗣也云岡山入寂延文八年十二月十二日か之ハ
宗綱六十八歳より二十一年の際任持せり
一書不述江國綿向神社大宮司出雲氏ハ南朝方あり

かは美里小聚後房卿遁世乃後志よりけ家より任移り
けり法王修了り出立り人々々々慶の境より云香子
余所よりも夕くを風よりき月氣より一篠の谷川
と云新を流く出雲氏より辨しなれたりと云
又江別妙感寺乃傳説より康暦二年に月廿八日後房
卿薨り年八十八岡山國師法嗣授翁宗綱妙心弟二世
とあり
又明和元年正月廿八日下野國都賀郡西義濃村長光
寺境内乃古塚を獲きたりし鋼塔一基と古鏡及ハ
古鏡をゆりし鏡乃録り整衣冠整瞻視と云六字を
識し表しハ當塗王經一字之禮一品一錢千部寶祚興

久并藤三任資通卿公冥福藤從一位宣房卿公福壽不
 二行者授翁敬白興國四年壬午正月吉日とあり
興國四年
北朝の康永元年の宣房卿建武三年七十九歳小く
 生家ありの世は比歳恩敬から凡八十歳小かり
 へい
 古錢多皇宋元寶錢二皇宋通寶錢四宋元通寶錢一開
 元通寶錢四咸平通寶錢五太平通寶錢二淳化通寶錢一至道元
 寶錢二景德通寶錢九太中通寶錢廿二天禧通寶錢十二天聖元
 寶錢廿八明道元寶錢二至和元寶錢五嘉祐通寶錢一嘉祐元寶
 錢五治平通寶錢二治平元寶錢十五熙寧元寶錢四元豐通寶
 錢十元祐通寶錢八紹聖元寶錢十六元符通寶錢十六政和
 通寶錢十五宣和通寶錢二至元通寶錢三廢減錢五百十九百
 七十六錢ありしなり



吉田内大臣定房公真影 清開寺 家祖

吉田内大臣定房云々権大納言經房卿又代孫權大納言
經長卿乃長男也權大納言經房卿乃記を吉記と云世
二卷あり又吉部秘訓抄三卷有り經
長卿の記を吉續記と云廿三卷有職乃岡高高くとて世
あり定房卿乃纂らきし所と云
子萬里小路宜房卿北畠親房卿と吉田定房云々を之房と
稱せしと形りせ乃家吉田了あ又けせけ吉田内府と稱
せしふふ屋經房卿乃吉田の神宗岡の纂近衛
乃邊了別業を造營ありより代く攝傳
せらと折承久三年鎌倉の義時り計らひとて後鳥羽
大御門順徳乃之上皇を隱岐後鳥羽阿波
院御佐渡順徳の
國へ遷し奉りしハ闘諍乃餘勢ふと東夷悍暴乃致と
處と云ひ屋しそれさへ末代乃ふ思儀と云々の身を
うきと後嵯峨院人王八十七代所諱邦仁と云は是より國人を
くよたと讀こふふむり承久三年四月廿日

順徳院御位を懷成親王小讓ら勢ちと一に皇位四の
義時を廢し奉り皇位を九條廢帝と云はさく高倉院第二宮
行助法親王乃皇俗の時乃少子茂仁王と云きを御位り即ち
後堀河院と稱せ其御子四條院仁治二年崩御の後皇太子
乃皇孫顯隆とせしハ藤原の謀りて御位の御子御位乃
邦仁親王を御位り即ちなるハ後嵯峨院なり
後乃立坊立后云々と云ハ皆關東あり議らひし云々
ぬふせ冠履を其を易しと云ハ人々も多しと時乃勢止
去とゆきふそ憂懼さ加之後嵯峨院乃后腹乃一宮久仁
親王後深草二宮恒仁親王龜ふとておとふと小二宮乃
御流り皇統相續を所幾人命を慮慮を相摸守時頼と
内々仰らるしハ正嘉二年二宮御歳十少く東宮子立
き終ふ後深草院所屬りて後深草院をわたりて東宮
御位り即ち後深草院なり終ふと文永四年後宇

多院誕生すくけは乃鎌倉時宗父時頼り志を成して
東宮三子教後深草院の二宮熙仁親王乃四歳あり
を東宮三子教後深草院を後深草院恨むおのり
同九年後嵯峨院崩御乃時頼御位を承く龜山乃市流
相續あり勢り教皇を中を大宮院後嵯峨院中宮教皇の
御母了遺詔あり一子代乃御守り置せらるる大宮
田村麻呂の太刀を大宮院より龜山院了傳えたり一
後深草院ふく恨む勢り入てありけるもや同十
一年龜山院御讓位あり後深草院即位ありけるも後
深草院より時宗へ仰りる旨あり一ハ熙仁親王を東
宮三子とす
後嵯峨院崩御ありしより後深草院父帝の
遺詔を引きたる我御子を東宮とふり玉ふ

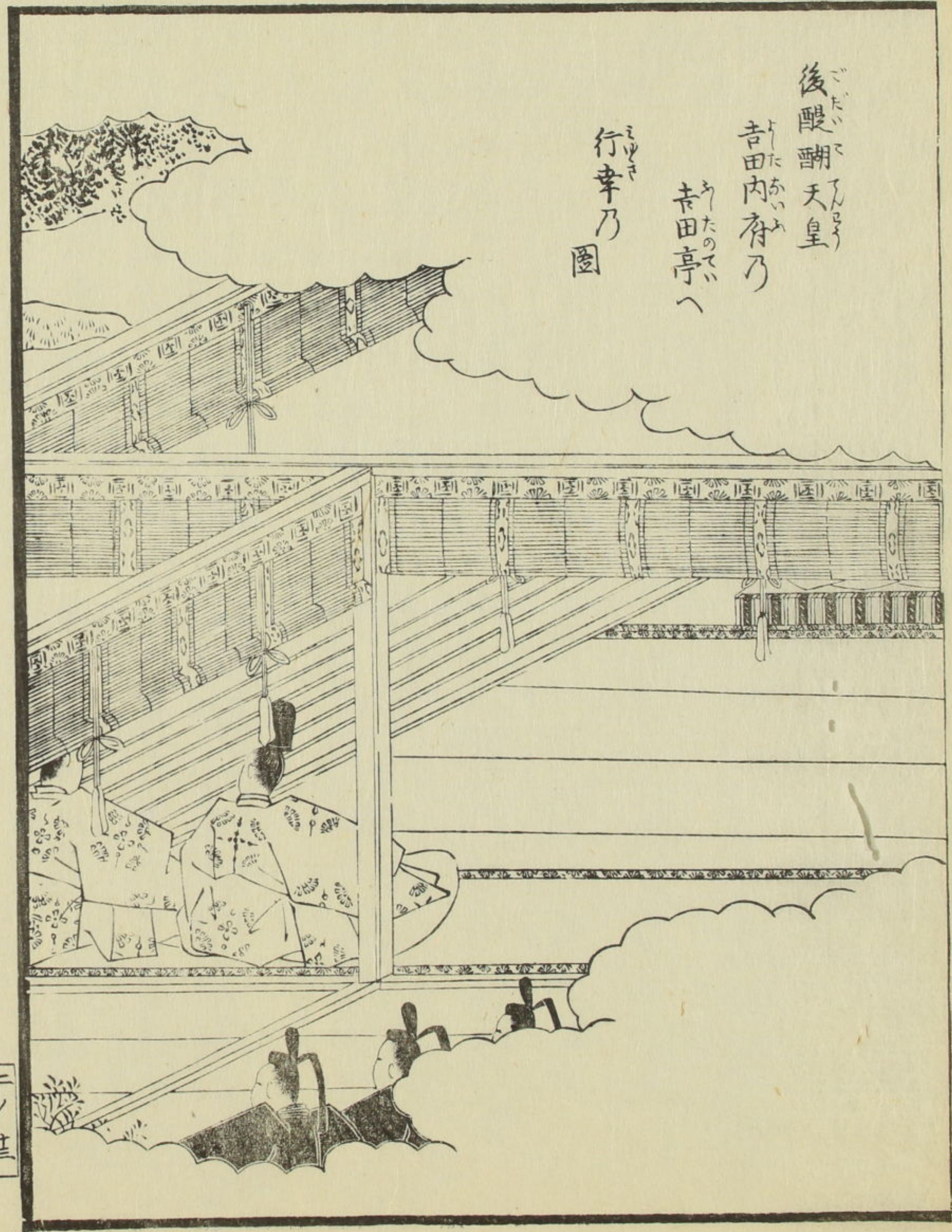
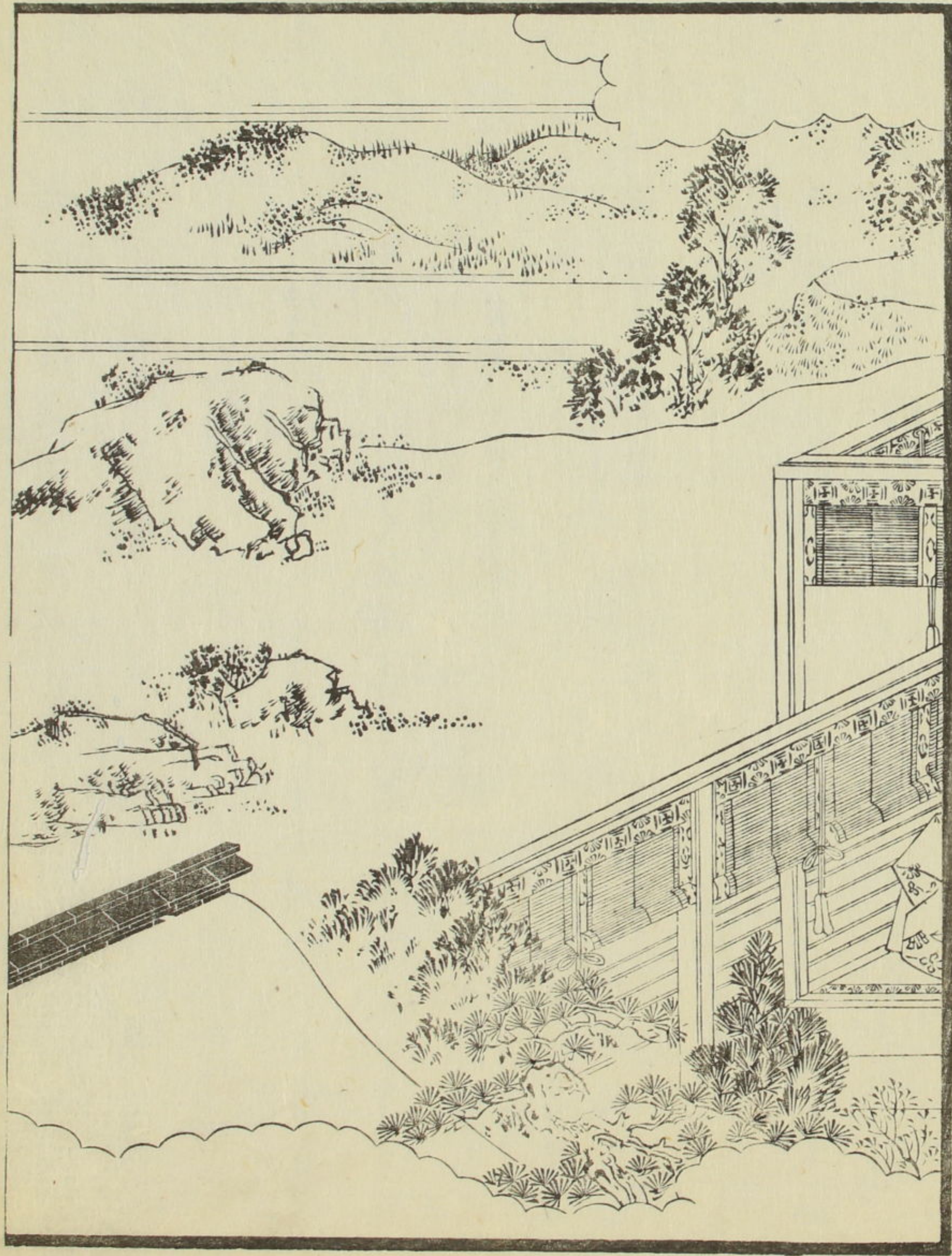
弘安十年後深草院御讓位あり一宮胤仁親王
給入伏見院ありて一宮胤仁親王伏見院を東宮
と以龜山後深草院と知子市相傳あり一ハ熙仁親王
宇多院より定房公を御使ふて東乃貞時時頼の孫へ
後嵯峨院乃貞時の祖父時頼へ憑仰りし遺詔を早
も忘却せしむるかと恨む仰らるるより貞時議ひて
東宮胤仁親王を市流了即承る後伏見院ありて後深草院
皇子那治親王を東宮とす一ハ後深草院市流を持明
院賣北新町の西安未小聚と云知持明院任洞の四
子ハ後堀川院乃御母ふく堀白河院と云後堀河院
の後ハ御母后の御所と云を以て持明院を仙洞と云
たり此後終り代乃市流と龜山院後嵯峨院の仙洞
の仙洞了たりし

とかが後宇多院を大覚寺を中興ふ所也ておとろまをハ成
御流を大覚寺と太平記にありたり時後深草院五十
六歳勲院五十歳後宇多院廿二歳伏見院の御流と替る
廿四歳當今十一歳東宮十四歳ふよりよ
かまふ即位ありて御治世を十年宛と定め勢らふ
さ中を定房ふ復奏しとありて後程もかく
後伏見院ありと勢らふ東宮 邦治即位あり坊より邦良
親王 邦治親王 立ふ入を 持明院殿乃御流より立を
ら御流しとて伏見院第二皇子富仁親王を東宮と定め
らむと後二条院 邦治崩御より後花園院 富仁
即位の時東宮を大覚寺教乃御流ありハ邦良親王を
世奉りて居りてハ 仲宮 尊治親王後宇多 とかさ勢らふ
是を龜山院乃定房を御使りて貞時へ仰らむと故と

楚嗣之 定房もよと 帥宮の傳りありまをば 執申より
有らるる 文保二年を花園院治世十一年ふあり勢ら
るはは御讓位あり御し中ふとありハ 帥宮位より
を後ふ東宮を 持明院教乃御方あり後伏見院第一皇子
量仁親王 時了を立たるへより後宇多院ハ 邦良親王を坊
子立たりてハ 中を強く作りてハより 遂に 邦良親
王を東宮とさせたり 邦良親王 帥宮乃御ふハ 一宮
尊良親王 十一年さかくは 讓良親王 十一年をと思召は共
法皇 後宇と高時 貞時と心を合さく 支奉りてハ 力は
そりて後をさらむとハと深く恨みおろめハるるハ 心中
元年後宇多院崩御の後 邦良親王を廢し一宮尊良親

王を東宮より立すといふ事とお有りて、これれはとも、邦良
親王廢し、事多しき故なり。中元として、高時を以て、
よりしりしより、所ん乃す、あ、以、嘉暦元年、東宮、邦良親王
ら、更しとき、このとき、たがふ、つ定尊良親王を東宮とし思はれり
高時よとは、量仁親王、東宮より立せ、あ、入へ、を、後宇
法皇乃強ち、子、邦良親王をと、作ら、おみ、おみ、海
た、夜、々、持明院、殿、乃、所、方、より、出、せ、と、す、後、の、な、ら、ん、は、り
了、於、る、も、定、房、を、所、使、あ、り、言、時、へ、仰、下、せ、也、け、る、也
後、嵯、峨、院、乃、長、講、堂、領、を、持、明、院、殿、へ、附、せ、せ、み、し、て、承
く、皇、統、相、續、か、り、勢、あ、り、上、り、た、免、ふ、る、龜、山、院、の、所、流
ま、く、皇、統、を、相、續、あ、る、も、一、の、獻、慮、を、高、時、り、曾、祖、父、時、頼、の

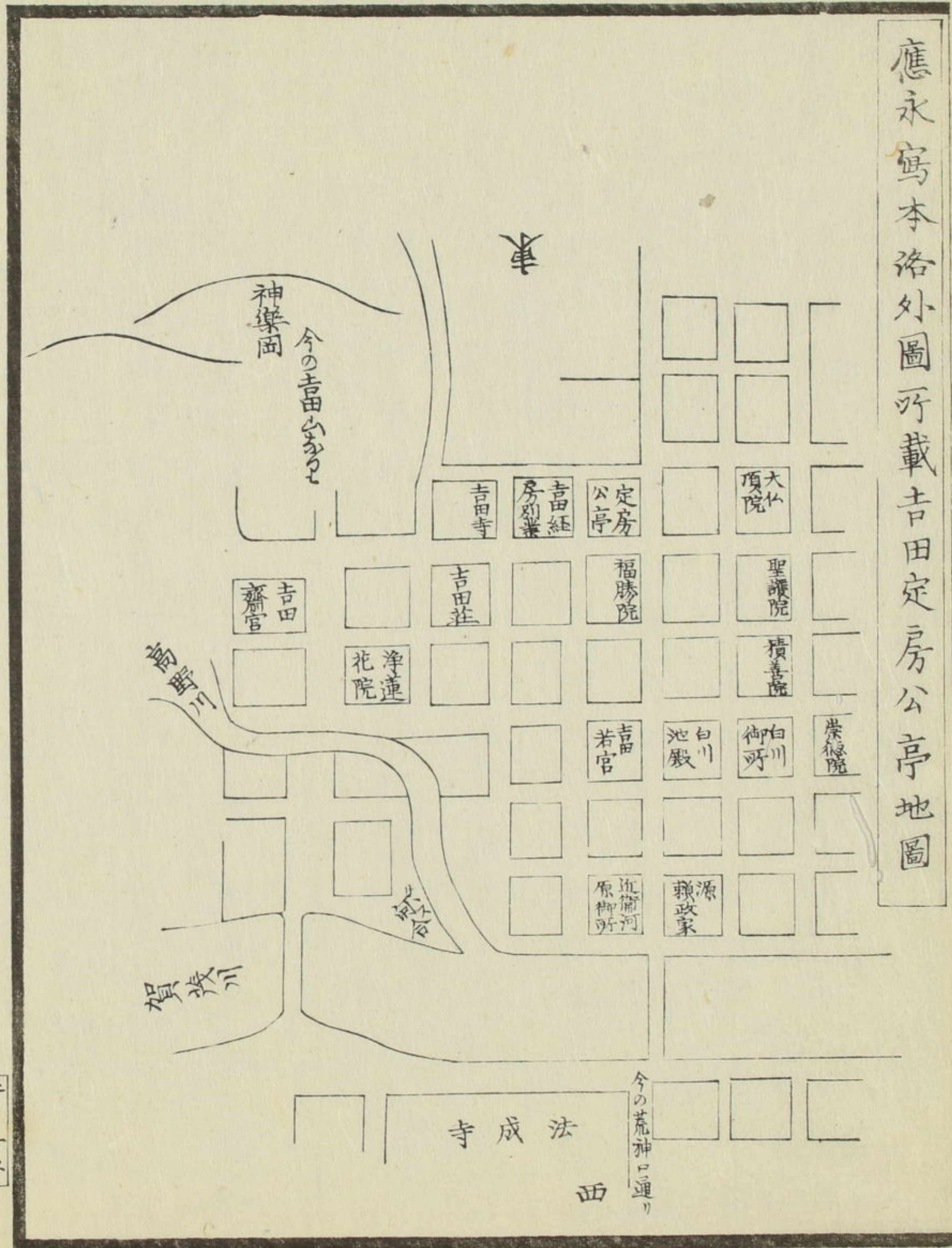
仰合せりし、を、高、時、り、父、貞、時、ひ、が、心、の、は、り、皇、統、を、二
流、の、分、け、た、り、持、明、院、殿、より、即、位、あ、り、は、長、講、堂、領、と
内、裏、御、領、と、合、せ、り、所、務、を、所、へ、入、故、り、持、明、院、殿、所、流
を、次、弟、り、富、饒、り、大、覺、寺、殿、所、流、を、殊、ち、る、所、領、の、五、や、も
を、さら、ば、持、明、院、殿、所、流、より、治、世、乃、同、々、長、講、堂、領、を、大
覺、寺、殿、所、流、へ、渡、り、さ、り、せ、へ、す、按、り、儀、ら、ひ、の、を、有、り
高、時、長、講、堂、領、を、た、り、後、嵯、峨、院、の、所、流、より、ゆ、へ、は
に、放、り、ま、る、へ、き、謂、ふ、り、と、く、仰、下、せ、り、あ、は、り、依、り
高、時、を、討、亡、り、せ、り、や、と、ハ、思、召、た、り、ゆ、り、お、り、定、房、を、三、度
關、東、へ、下、向、あり、一、度、を、皇、統、兩、流、乃、東、議、を、更、え、永、く
後、嵯、峨、院、乃、獻、慮、を、挫、り、一、度、を、帥、宮、を、一、度、め、り、皇、統、を



一流小歸一一度は長構堂領乃奪小座りさ教を如と
い座とも知さふもの如く高時をものらせし事
心をゆくと傾入け中人有とまけりまきと後宇多
法皇より無雙近習ありて元應三年正月一日三春たり
去時節分乃序方遠とく大覺寺より吉田亭へあり勢
ひしとかや御幸御類抄了見也後醍醐天皇を帥宮と
きし市時より親しくおりめられた即位乃後元亨二
年十二月節分御方違了吉田亭へ行幸あり
勸賞了定房公從一位了叙一長男宗房邊衛少將了補
らせし心慶元年後醍醐天皇隱岐國へ遷幸あり後
都子止めりせし光嚴院了仕ふしと後醍醐天皇還

幸乃後建武元年九月九日内大臣了任せり十二月十七
日民部卿を兼ふしけふり因二年二月十六日内大臣を正
表ありつとと民部卿ハ元の如しと延元元年正月後
醍醐天皇山門へ行幸あり川系河内へ系内一明星日札
二間乃河内等を五收りく山門へ登ふありはふを代
公乃力ありと中き後芳野へ臨幸ありいは定房公
もまき芳野へ系候きりて因三年正月廿三日吉野公
ふく薨せり也春秋六十又と云天保壬寅まき長男ハ
大納言宗房卿新葉集乃他者あり次々從一位大納言守
房女子を龜山院乃堀川と云後了ハ大炊御門内大臣冬
信云乃室家みと氏信の母と系圖了見也

應永寫本洛外圖所載吉田定房公亭地圖



菊池次郎武時入道寂阿真像



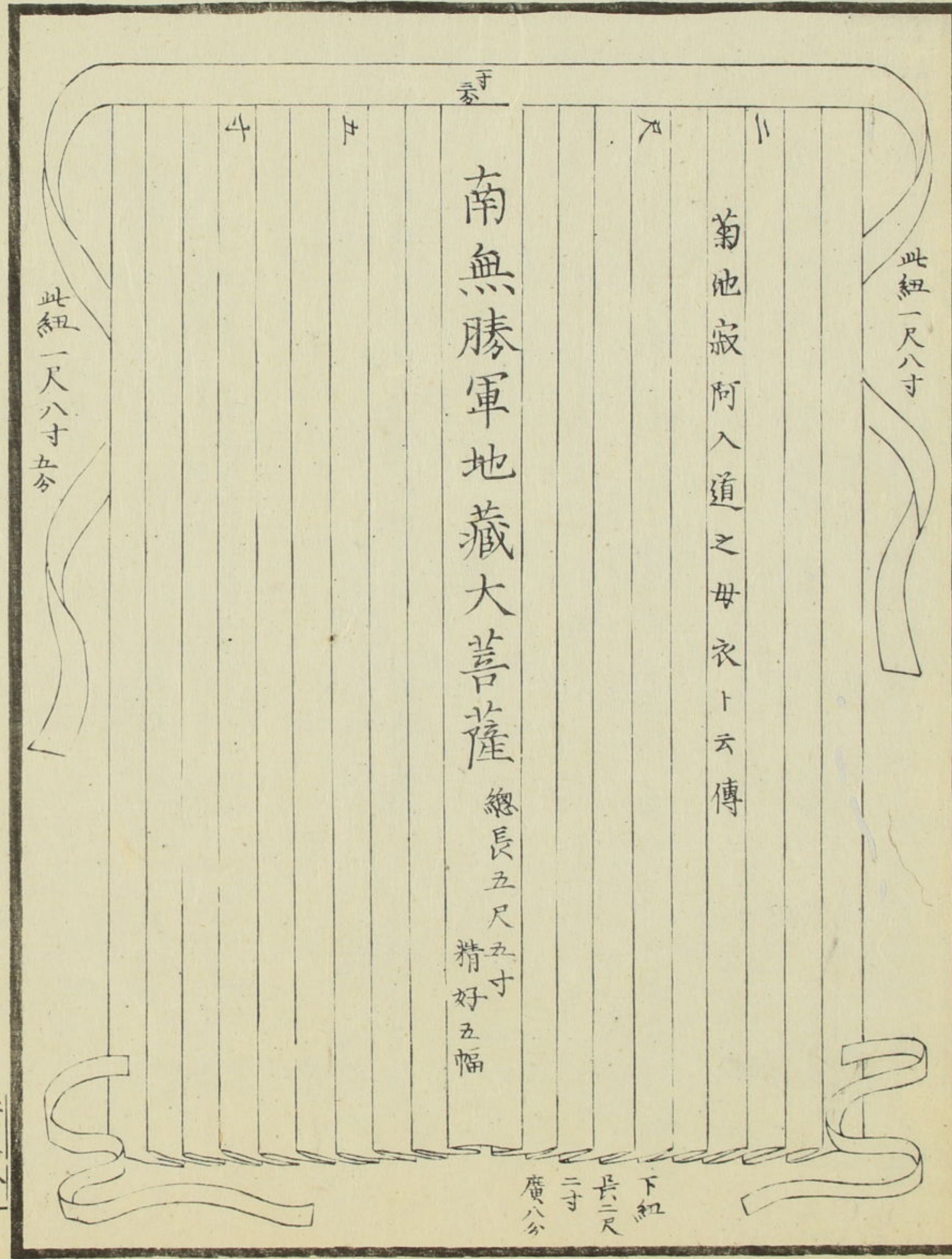
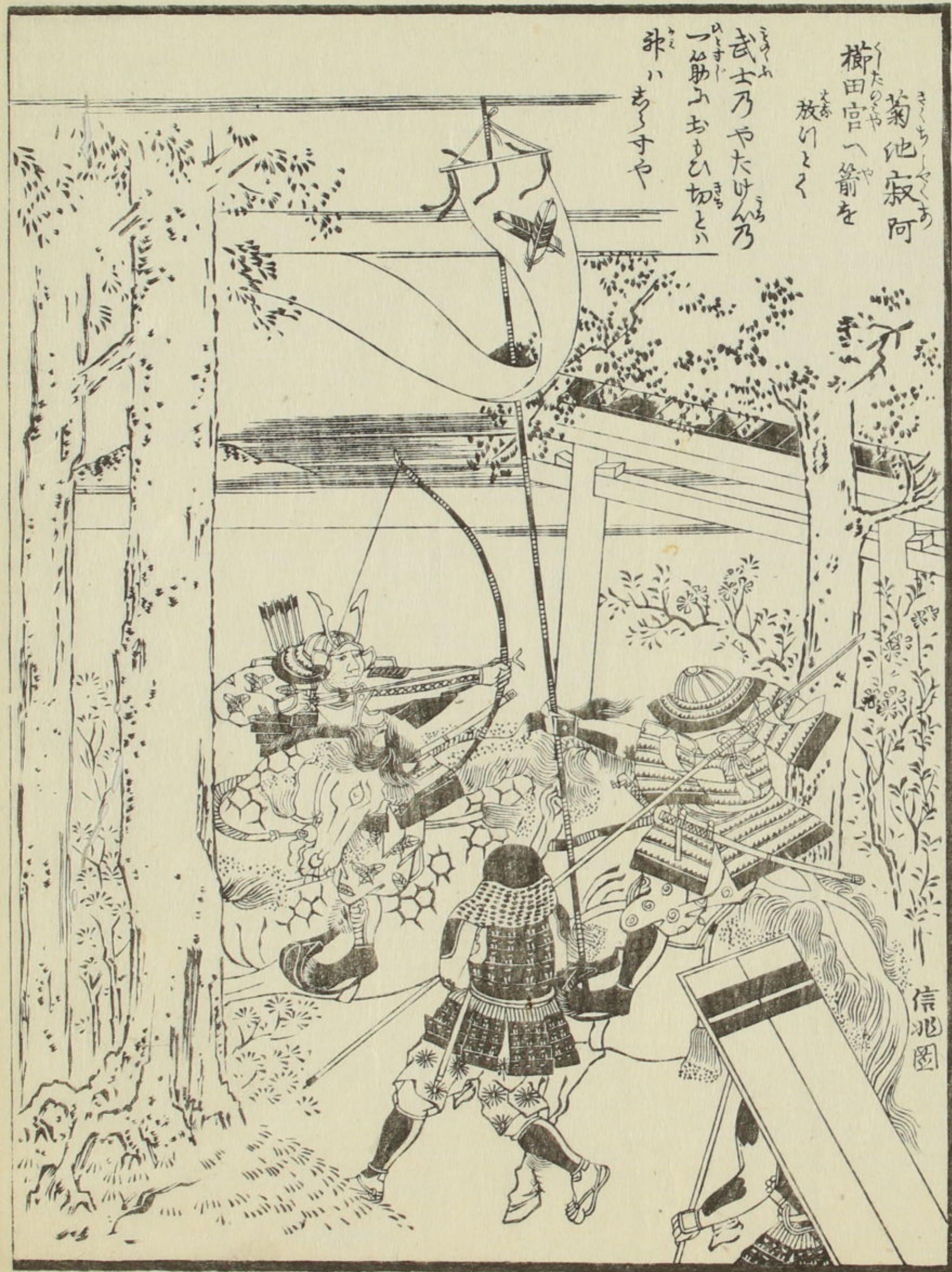
菊池次郎武時入道寂阿ハ肥後國菊池郡乃地頭なり其
先祖を尋ぬる中関白道隆公乃三男太宰権帥敦基隆
家乃子と對馬守政則と云寛仁三年四月異賊嚴來乃時
博多松原を警固一異賊と合戦大将乃首を獲たり一
より勲功に賞とく九列兵士乃頭たる多倫と宣旨を
賜たり其子太宰少監則隆延久二年小菊池郡を賜り
て屋敷所とせしは菊池とは名乘一なり則隆十二代
の孫を菊池三郎隆盛と云是武時乃父なり武時一
人乃姪あり無雙の義人なりしは二条関白道平公乃
めさせし姪一人を欲く以て振衣ハ後醍醐天皇乃安福
殿女御榮子とせしむ
肥後國菊池郡乃地頭あり師忠
公乃御封あり師忠

の祖父小より備以少封とは菊池郡乃民戸二戸あり
入戸小より也其民乃祖と云可中男乃調庸を合と
て賜ふなり是は祖傳庸ハ二条殿乃納め地と成と
對馬氏の有あり依く二条家ハ領家と稱し菊池ハ地頭
と云地頭とも云二条家の武時を名く雜髪と寂阿と
稱し男十人あり長男肥後武重次男掃部助武敏
三男肥後三郎頼隆四男對馬守武茂八男八郎經重六男
阿日房陸舜七男七郎武吉八男豊田十郎武光九男義次
郎武義十男武尚十一男豊田武豊十二男肥後次郎武士
十三男肥前守武隆十四男肥後守武澄十五男武方と云
元弘三年後醍醐天皇隱岐國より伯耆國船上山臨幸
ありしとき寂阿入道子息を使とて綸旨を請せし
子之上敬感ありと錦乃御旗と綸旨を請せしと下

寂阿大夫喜々以貳貞經能前國人校母ハ武後氏ハ代の
子孫代ハ貳貞經ノ任大友貞宗大宰少貳
大宰府ノ任と共々鎮西探題北条英時を討亡り
 然し後船上り馳走んとす

鎮西探題ハ弘安八年北条遠江守為時北条義時ノ三男相摸時重時
男を鎮西奉仰とす
 下向一筑前国姫濱十二年居任一永仁元年鎌倉へ
時頼の五男修理大夫宗頼の長子兵庫
かく波羅の北がより九列へ下向
 以時家名越左邊將監を探題とす
 元年北条英時を探題とす及一人りかきり
 以時を博多津り城を築く任すと鎮西要略とす

いふふ〜〜かあ洩たり探題英時あを聞〜菊池を
 ぐふ菊池よけとてやけ事あつたととひ〜ハハ少貞大
 友り許子使をを〜多々へ推寄と〜と牒〜金を
 けるよ大友ハ定りお返事お返しもさハ少貞を忽ハ返り〜
 菊池の使者を斬り英時と一〜成奴寂阿大夫怒り家
 子郎等百五十餘人ふ〜博多を〜打三け分時拵田
 宮乃前を馬りて打け分り徹り馬と〜と動り寂阿
 上り乃編夫を〜打番い〜か分移りもお〜ゆさ一
 天弟衆の衆乃論るハ依り朝敵退落りお向ハ寂阿の衆
 打替め移入〜と謂ふ〜として祠乃扉を射り〜馬ハ
 ろい〜以進〜けり後子見ハ〜大かハ麟矢ふ〜

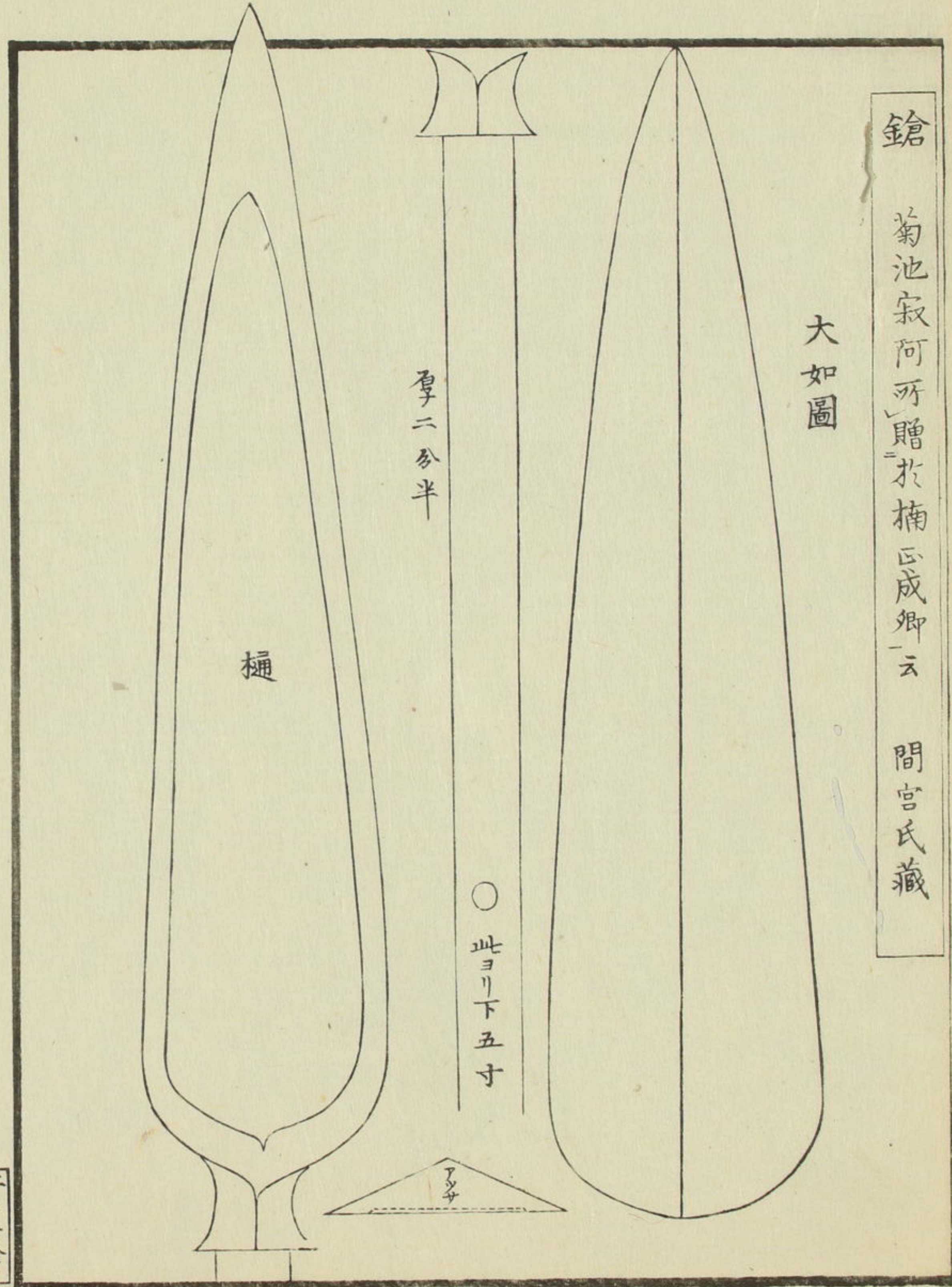


鎗

菊池寂阿所贈於楠正成卿云

間宮氏藏

大如圖



三ノ寸

死々々り擗田井乃軍の凶を承され々かと云人亦有
 寂阿を討死と思ひ定めてけは故郷へ形見を返るとて
 故郷へ今宵をり乃命とも報くや人乃これを待らん
 其乃咽の日博多へおしを思を報き以責たりかは
 英時今を是れと脱る自害きんとせし妙へ少貞大友
 軍兵數子騎みく英時よ力を合以寂阿を色を見く嫡子
 衣重了又十餘騎を引分ち菊池へ敵へあてて軍を起し
 朝敵を亡し父の仇を報きよと告りん後乃事由
 細くと教訓し元弘三年四月廿六日北前國博多津ふく
 経年四十二歳討死し名を九原乃若乃止小殘し墓を万
 代乃後の世に傳えけり

天保壬寅
 又百十年

信元嘗く九列地圖を見しふ肥後國菊池郡と筑前國
 博多津と其相距之凡二十里及陸一河内國石川郡
 乃六波羅を隔と相比と致す頗遠く英時と仲時時益
 の勢と相較ふ致す英時の又劣弱あり正成郷の其疆
 域の割據しし始終乃勝を全く寂阿入道其郷里
 と奮發しし一旦乃銳氣を振人事就ふ至らば身
 殞ま致し痛惜堪以然王とい命とも死了臨之長子
 不後事を託ま致し正成郷と全く同く子孫累世官軍
 乃魁首としく正統天子を匡翼まるともす甚お他
 たり寂阿傳贊志操凜然としく崑山乃玉乃如く杖
 乃霜る似くりと至云盡せりと云へき形なり

大坪左京亮有成入道道禅真像 伊勢氏藏



大塚比五

迄令侍能乾

以規矩者古方指山

を近用柱自由未士

庶島神託驅弛如神別錄人論

清水不現見化白子純良紛贊

往來曲直奉緣靴不聯之

唯云狡狴牧地致像

是後子輩必壽

京也祿門

道禪入道の贊像

の正ふあり乾山士論

和尚の乾峯古曼乃

法弟は贊の書法を

雙合文と萬室金書

小尺也讀法兩邊より

念進と云これあり

大塚九京亮有成入道道禪ハ桓武天皇九代野與六郎基

永五世淡河九太郎有家乃男あり武藏國秩父郡黒谷村

了住を今黒谷村了鑄錢坊鑄沙汰かと云身を唱張あり

鎌倉將軍家小仕く弓馬にお實教中乃礼儀了精一あり

志より元弘三年鎌倉乃滅一後是利教の御内をりけり

伊勢伊勢も貞継入道照禪より我家了徳一入く銀子より

馬鞍燈教中故實を尋問たりしふより道禪入道也と云乃

深切なりと云はる衣袂拂く相傳と靴燈規矩相伝記伊勢

併考へ伊勢照禪の長子伊勢守貞信の長男貞沙ハ

教中禮儀を奉りて次男貞徳ハ鞍燈規矩を相伝し其

世子孫く相傳なりと云道禪入道乃鞍燈を伝る規矩を

庶島大内神子所より自得き一と云應安年中より在

乃親征を伊勢七郎勅解由左衛門尉貞長に相傳へ因十
 四年十月十七日卒

一書小道禪入道と大坪式部大輔慶秀及ハ大坪亮三
 帝吉利入道直弟三人を混雜し一人としるものあり
 今案ハ式部大輔慶秀ハ應元年六月十四日八十四
 歳あり卒と云つ然レ應永十六年己丑歳ハ生也一人
 あり道禪入道没後弟三年ハ南より大坪亮三帝吉利
 入道直弟ハ永享九年ハ愛想春茂書た是ハ道禪の
 没後三十一年ハ南を以て等々一人あり所をを
 知へし於詳ハ鞍鐙新書ハ録出也

大坪入道道禪真作鞍 伊勢因幡貞常所傳

前輪馬夾一尺九分 爪長六寸六分

中墨より八寸三分半

山高三寸二分 鰐口二寸六分

手形一寸五分

後輪馬夾一尺二寸四分

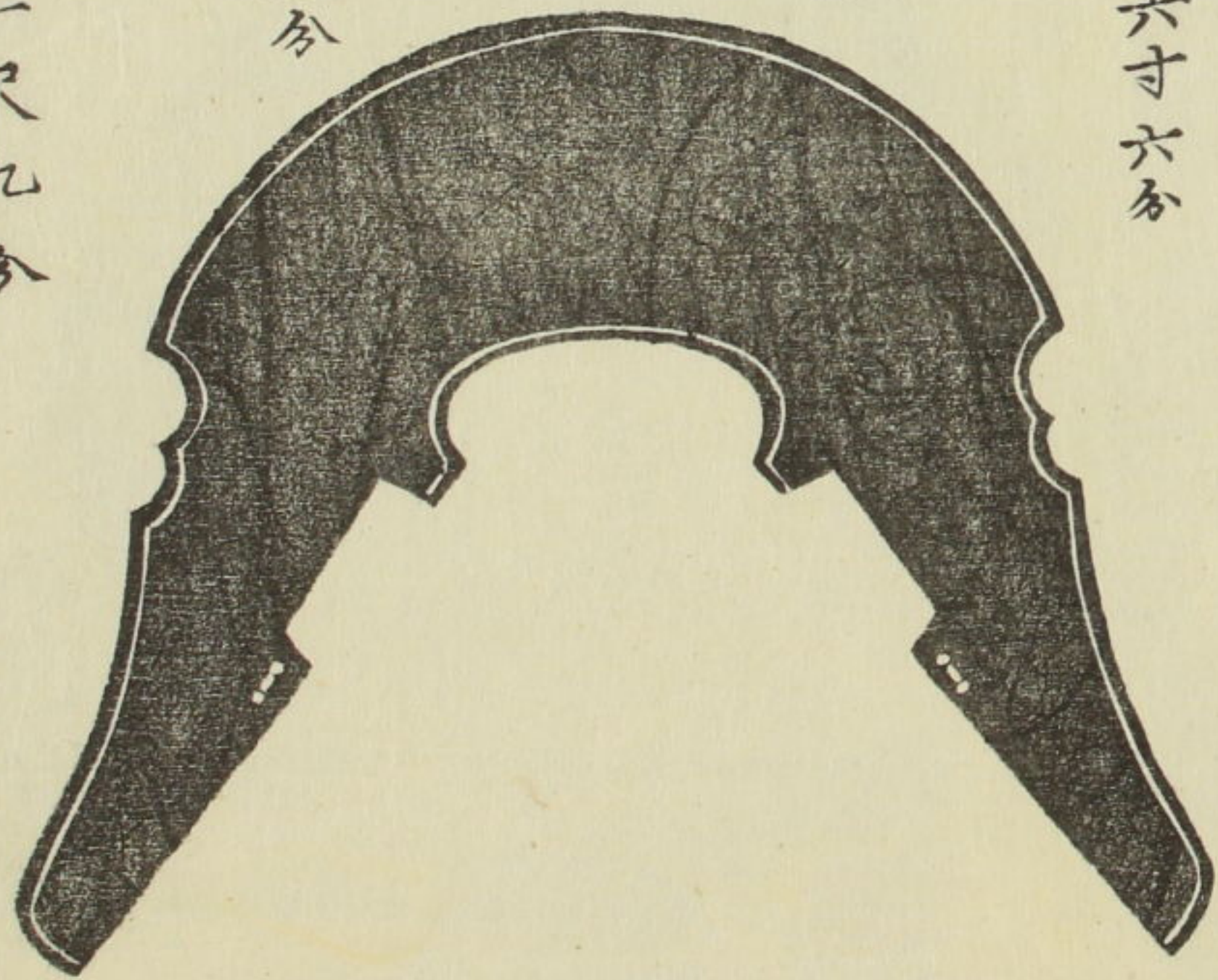
爪長八寸五分

中墨より一尺二分

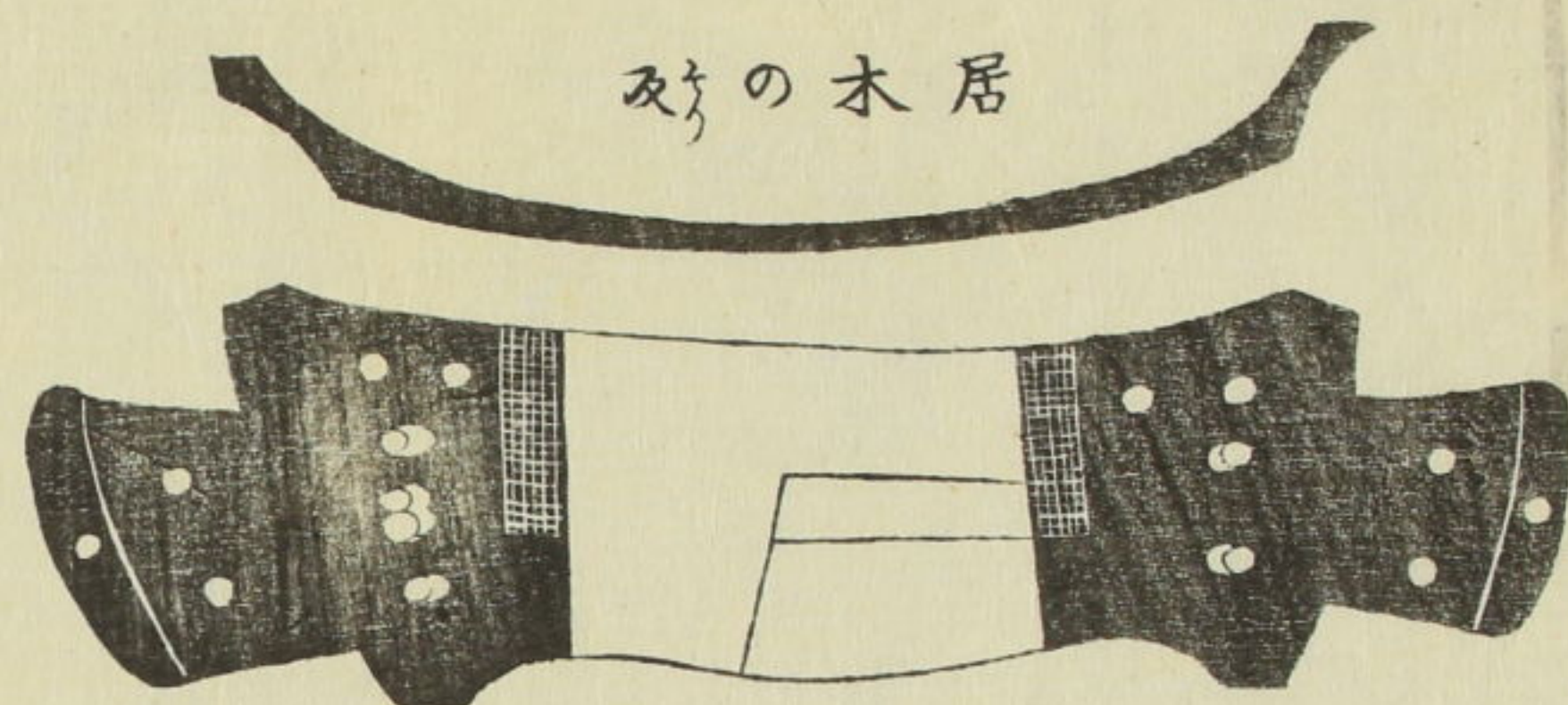
山高三寸七分

折目五寸六分

總高一尺九分

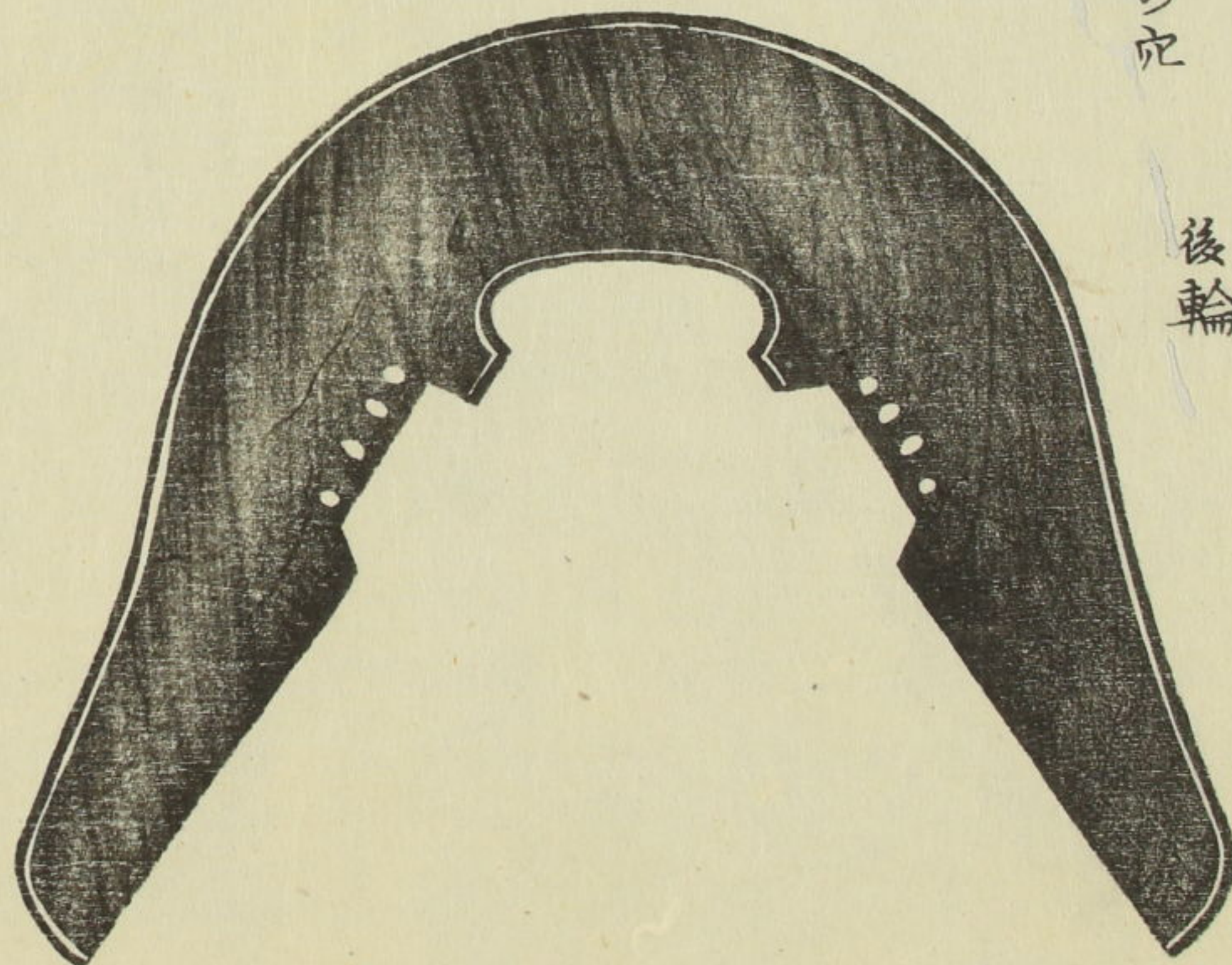


頓阿法師壽像



居木

取付の緒付の尻



後輪

頓阿法師父を良阿と云、梶井執當法印源全梶井松平、
梶井乃定と云くあり、御代、宮門跡より、攝家將軍家、御一代、小
とあり、同書、三綱堂、無公人下僧妻帯、禁四足、二足、不禁魚と
と云、三綱ハ輪番、執當職、任、執當ハ、乃二男、小野源全
山門ノ源堂ノ司ヲ知ナリトあり、思、乃二男、小野源全
乃京極攝政師實公、御堂親白道長ノ四男、小野宮大納言
能實卿乃子、梶井別當忠頼五代乃孫あり、忠頼長承元年
ハ歳辛と云ハ、梶井仁豪、忠頼乃子、全春ハ、青蓮院乃御留
僧正住持の源了あり、忠頼乃子、全春の子を、梶井執當法印仁
守職、みく、中納言、上座と云、全春の子を、梶井執當法印仁
全と云、仁全、二人乃子あり、兄を、執當法眼承辨と云、即
源全乃父なり、弟を、執當法眼仁尋と云、和秋秘傳抄了頓阿
仁尋ハ、仁尋乃子、仁全暫く、頓阿初名ハ、泰尋、山門了住、
和秋、乃烈國了、と云、頓阿、初名ハ、泰尋、山門了住、
後了高野、山不登、里大納言、為世卿、乃住、と、孫、小田原谷

乃花折院了入、薪水了給仕、名を感空と改む、為世卿
和秋の師あり、云、卿補任、嘉暦四年八月廿五日、為世卿、
出家八十歳時了、前、權大納言、二位、下、為世卿、
院、不傳、八、八、赤曆、四年、登、山、と云、為世卿、
頓阿、四十一歳の時了、あり、
知人、か、一、と、云、和秋乃道、和秋、
為世卿、薨、年、系、固、了、云、云、卿補任、嘉暦四年九月廿六日、
推中納言、為世卿、叙、後、二、位、同日、辭、と、云、云、
十三日、還任、と、あり、
か、か、り、と、為世卿の表了、依、
山を、出、く、系、不、歸、里、仁、和、寺、の、邊、了、住、け、
ふ、ふ、り、く、時、了、あり、
と改め、意を、風月了、遊り、
元弘、建武、乃表、亂を、安、ら、り、
家、尊、氏、室、篁、院、將、軍、家、義、詮、之、か、和、秋、乃、道、を、慕、
と改め、意を、風月了、遊り、
元弘、建武、乃表、亂を、安、ら、り、
家、尊、氏、室、篁、院、將、軍、家、義、詮、之、か、和、秋、乃、道、を、慕、

小めさしむけりてと草菴集より及後、後善光園抄改良基
二 糸原二 和歌乃讀り、不審を條々、あかし、出々、是
 と尋ねらむけるを、て批判し、て、愚問貫注と
 名付、世より披考されけり、貞治二年乃事、好
了 貞治才二、曆推、強半、春、二、湖釣翁とあり、
湖 釣翁、ハ良、製、ス、乃、修、各、ハ、比、年、二、十、日、歳、頼、阿、ハ
 七十、六、同、一、年、二、月、廿、九、日、後、光、嚴、院、乃、室、名、ハ、
歳 ちり
 為、明、卿、新、拾、遺、和、歌、集、を、撰、り、也、一、不、同、三、年、四、月、廿、日、四
 季、の、歌、六、卷、を、奏、覽、一、返、納、以、家、お、あ、一、十、月、廿、七、日、為
 明、卿、薨、逝、お、し、り、一、慈、難、部、を、は、頼、阿、ハ、撰、を、せ、り、り、
時 了、浄、辨、青蓮院乃慶運 浄、辨、法、印、の、兼、好、と、共、に、名、
執 當、法、印、子、同、く、法、院、 兼、好、と、共、に、名、
 く、し、し、世、より、和、歌、曰、天、王、と、稱、き、一、形、り、あ、ふ、と、き、曰、天、王、

打寄、く、探、題、六、首、乃、歌、よ、を、け、り、時、頼、阿、題、を、
 出、け、り、は、は、慶、運、頼、阿、乃、り、た、か、題、と、あ、ぬ、題、と、
 歌、く、あ、ぬ、ぬ、あ、ぬ、あ、ぬ、あ、ぬ、あ、ぬ、あ、ぬ、あ、ぬ、
 乃、く、靜、ふ、六、首、採、出、り、る、歌、一、よ、り、一、人、さ、
 譽、乃、一、一、歌、と、き、慶、運、一、よ、り、一、人、さ、
 慶、運、一、よ、り、一、人、さ、一、一、歌、と、き、慶、運、一、よ、り、一、人、さ、
 運、功、り、あ、そ、と、い、ひ、け、り、と、好、り、後、不、
 靈、鷲、山、正、法、寺、と、云、東、山、乃、あり、
 去、く、天、乃、別、院、たり、一、中、興、園、阿、上、人、
 頼、阿、上、人、ハ、文、和、四、年、乃、出、家、たり、
 頼、阿、六、七、歳、乃、時、九、ハ、同、歳、と、り、
 小、徑、と、云、西、行、乃、齋、徒、と、云、
 文、中、元、年、八、十、日、歳、了、
 終、る、墓、を、雙、林、寺、に、
 天、保、五、
 寅、三、日

草菴集子 西行上人すゝ修けか双林寺としんりやま子しんりやま 法しんりやまひしんりやまくしんりやまよしんりやまあしんりやまは

あゝ〜あゝ〜あゝよのまを君あの入るその二月にふたつき乃花はなの下した後
金玉きんぎょ双林寺じゆりんじの洛陽らくやう東とう山さん高臺こうたい寺じ乃此このこゝ了りやうあり傳教でんきやう大
師しの閑かん養やうあり天台たいたいの別院べつゐんなり頓阿とんあの住ぢゆうけか以もつハ勝
妙房せうぼうと云僧住そうぢゆうきし頓阿とんあ乃失なげふし後ご至徳しとく元年げんねんふハ
信しんの寺じを園ゐん阿あ上人じゆんじん乃階かゐ唐たうしと自みづかハ宝珠ほうしゆ菴あん了りやう後ご呈てい住
け系けい今いまの時とき宗しゆ了りやうハ
ぬめりありとさう
又また西行さいぎやう上人じゆんじん乃双林寺じゆりんじ了りやう住ぢゆうる愈いりし比ひ二月にふたつき十六じゆ日にち
人ひと々々来きりく佛事ぶつじの秋あきよりさうさうさうさうをさひ出いく
昔むかしとさうさうさうのさうさうにさうさうさうさうのさうの面おもて教けう
西行さいぎやう忌ぎを乃なひしあふへしちしは秋あきみくハ
のちりハ双林寺じゆりんじ了りやう住ぢゆうるさうさうさうさうさうさう

頓阿法師真蹟短冊

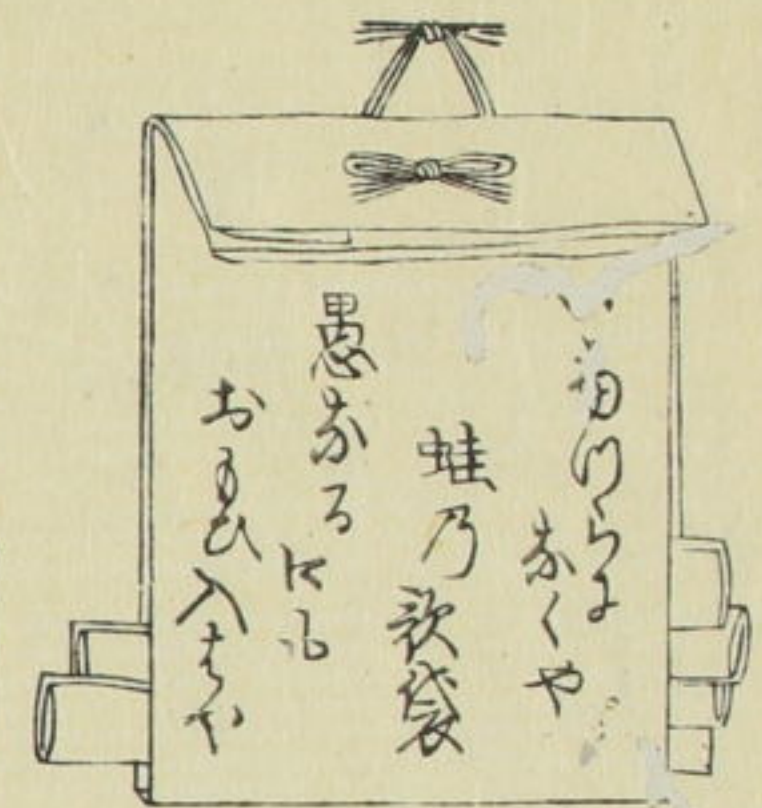
馬

のしりかん松
ぬまさうわのぬらう

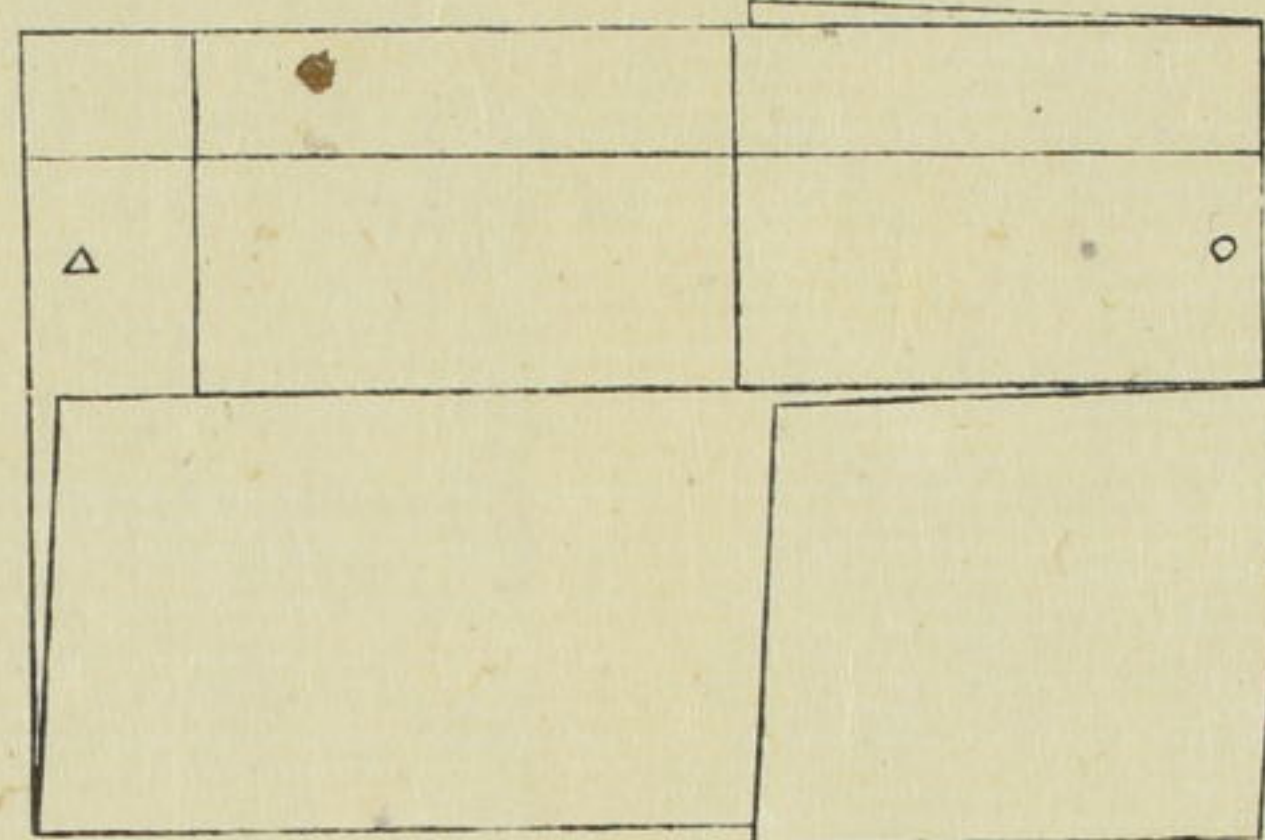
物ものさちくまハあなわ

つありのみね 頓阿

秋袋 頼阿法師所造 嗟哉隱士藏



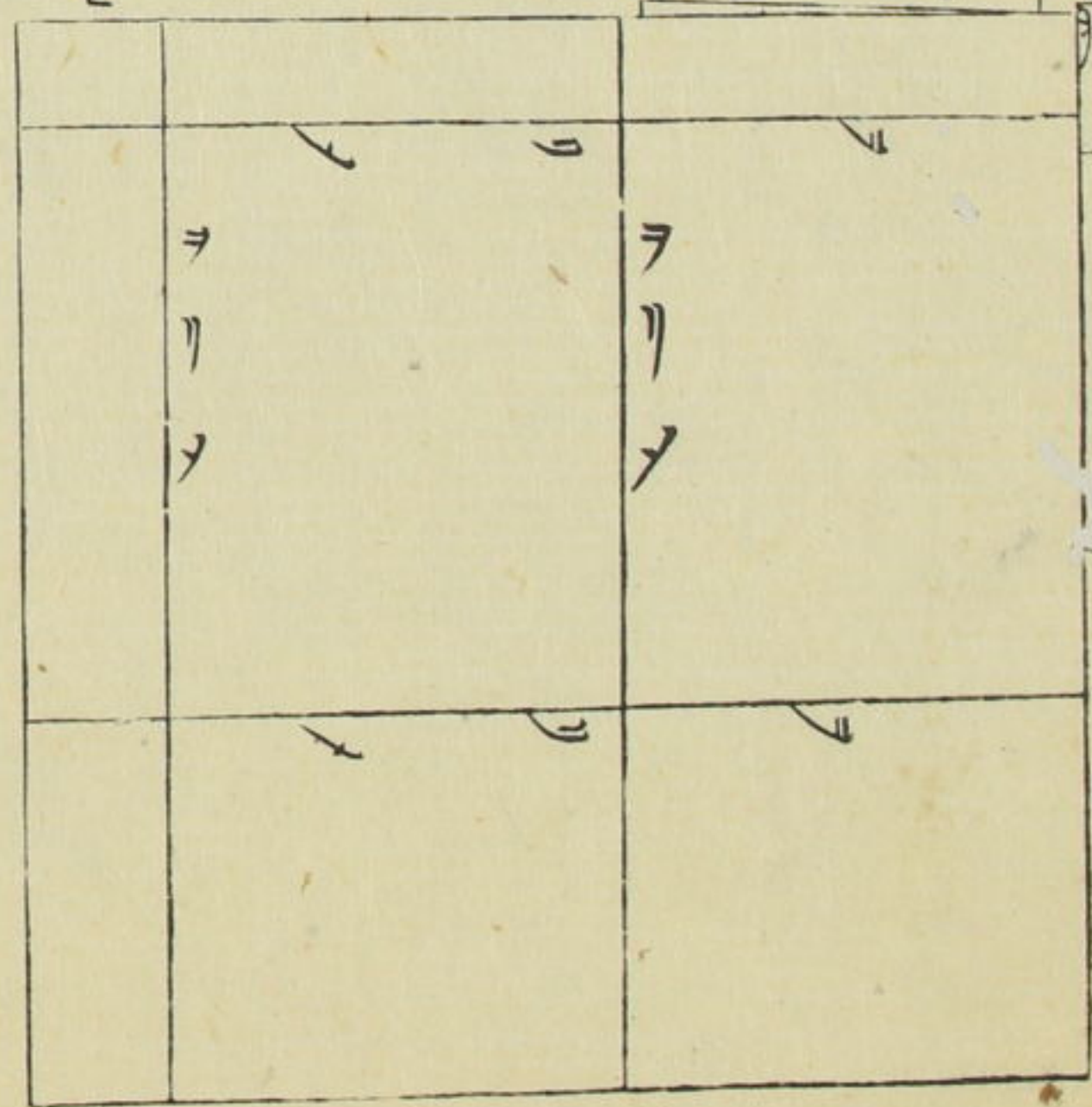
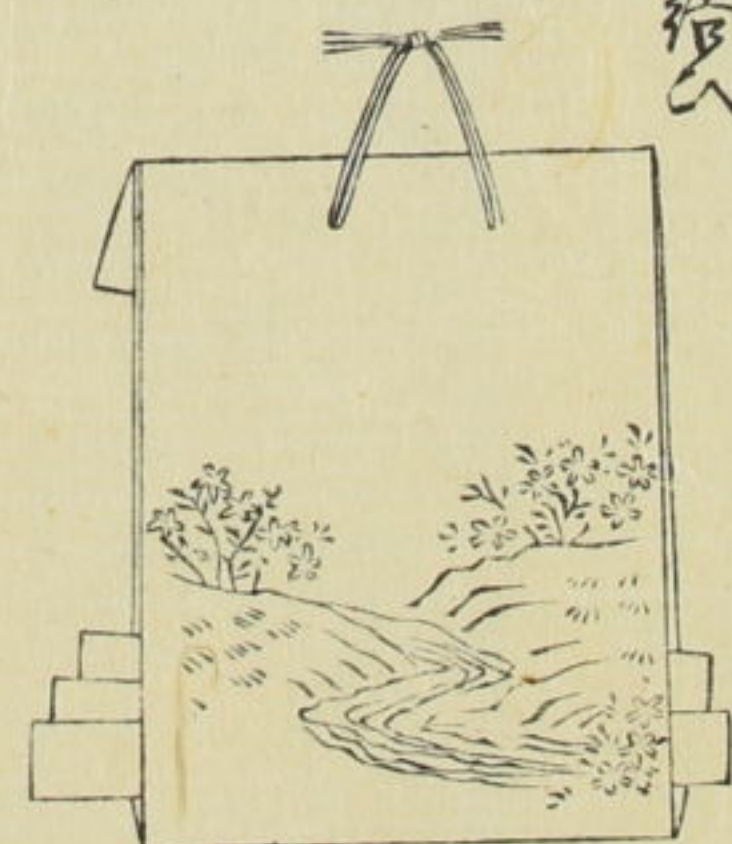
折二第



第一折
圖乃ぬく大高
おもも檀帝ふ
ては折
第二折乃
よく折くつふふ
△印のふを
○印のふを
と所をへへ
をのつと袋と
あふ形り

エをおく水引かき後へ
杖のかかるえ
裏ふふ吹ふれを
かへへ

詠草をうけむと
圖のこし



又花乃比 頼阿法師 園入を 終ひく 山家花と云と
をよ海をらまゆま

今日 けふ 秋乃 暮るや あそふらん 花咲ふ 乃 侯ふ 後
まはまふ 日なり 入りて 入りて 入りて

庭乃 面う ちり か消え 花乃 香たり 梯かる 仕を
あふ 山あり ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね

頼阿法師 園入を 終ひく 山家花と云と
をよ海をらまゆま
今日 けふ 秋乃 暮るや あそふらん 花咲ふ 乃 侯ふ 後
まはまふ 日なり 入りて 入りて 入りて
庭乃 面う ちり か消え 花乃 香たり 梯かる 仕を
あふ 山あり ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね
頼阿法師 園入を 終ひく 山家花と云と
をよ海をらまゆま
今日 けふ 秋乃 暮るや あそふらん 花咲ふ 乃 侯ふ 後
まはまふ 日なり 入りて 入りて 入りて
庭乃 面う ちり か消え 花乃 香たり 梯かる 仕を
あふ 山あり ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね

又靈山了便を留りし所子尤大納言
後尋より
中時
又

たのひにて喜ばるるはと訪し嵐の橋を
返し

花さりとてはぬけりるを忘ぬる雪あまのり
今日々訪
時ハ大日本史より後豊凶
又御子尤入る大納言かくも後ハ乃道
年豊遊と云ハ後醍醐
天皇の勅定と云らる

へく寸教訓し御りか座をよし
大納言
二ノ廿六

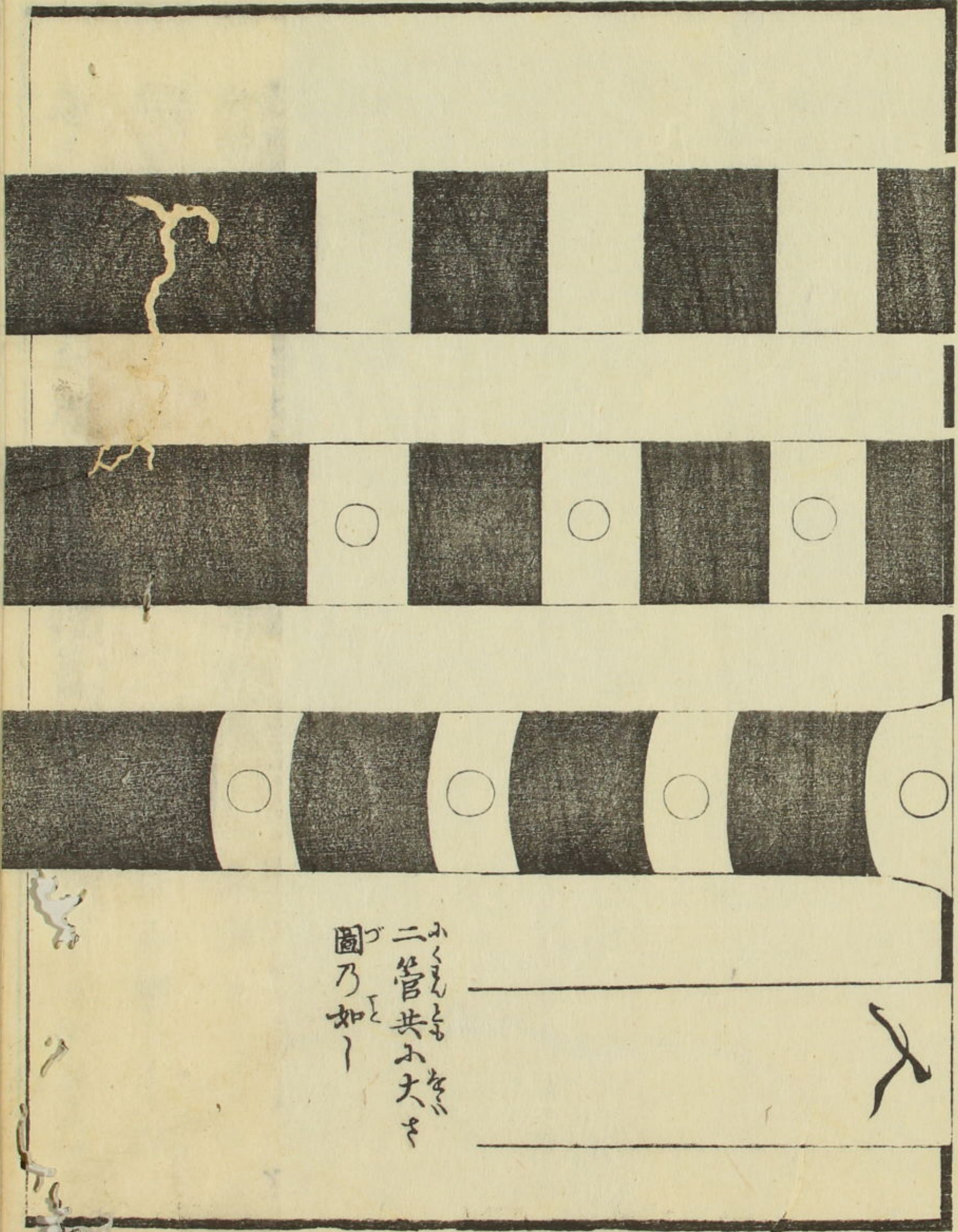
給くはく座仰下と云
御り

勅あまはあひかきて持あま乃道了頼
御り

雲井を問えけるを私款乃浦乃芦間の橋乃音ふも
ぬを時了大教とあふを以て考ふは元徳二年正月廿六
勅定を後醍醐
天皇あふかり

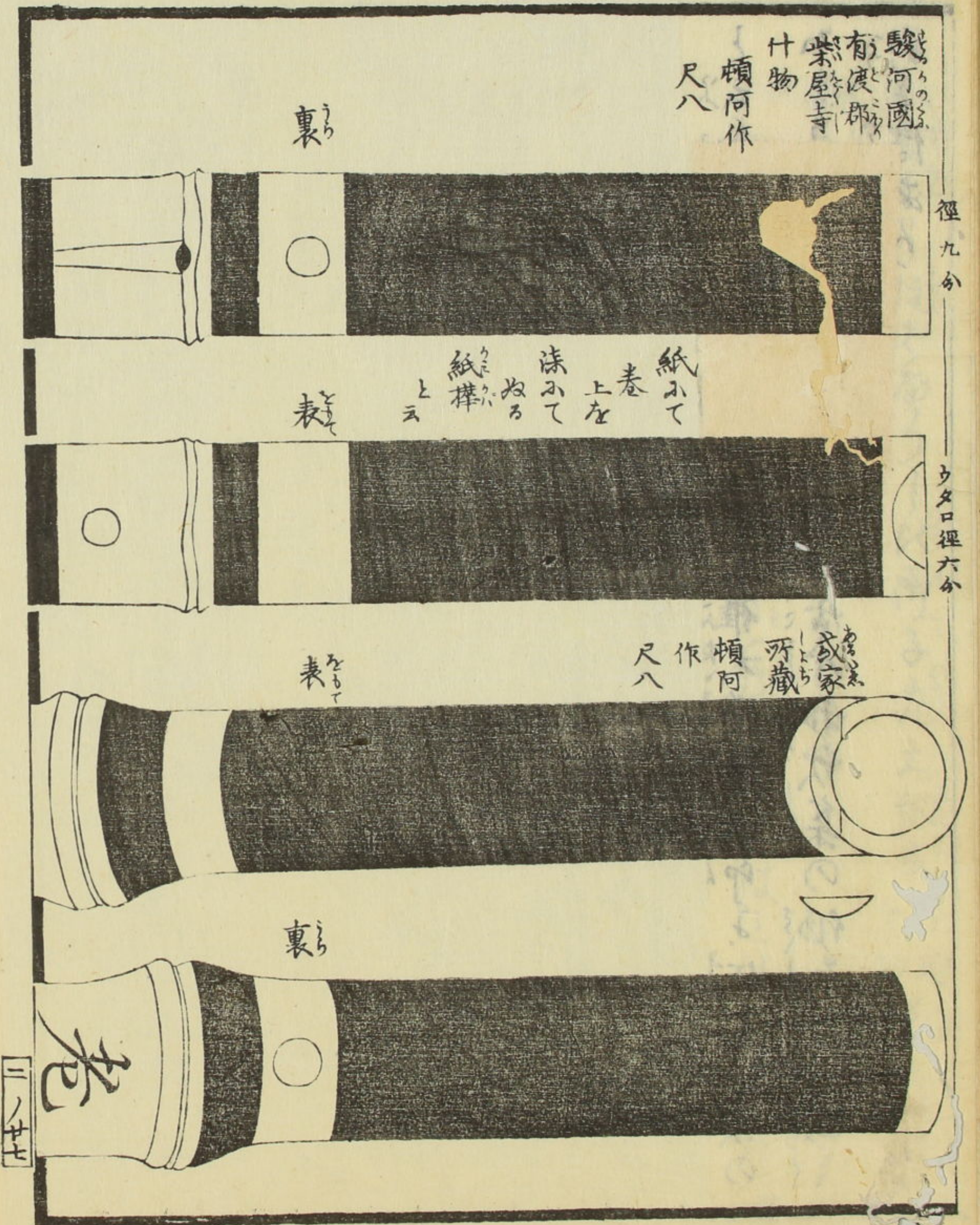
頼阿乃子を經賢と云推井乃執當法所を相續を經賢の
子を堯尋と云おあく執當法印たり堯尋の子を堯孝

と云私款所乃用圖と云推大僧都法印子任は私款の
不す也道と云らるるは新續古今私款集の他志たり後
別子傳あり



小くは
二管共小大
圖乃如

入



駿河國
有徳郡
紫屋寺
什物
頼阿作
尺八

裏

徑九分

紙ふて
巻上を
沫ふて
ぬる
紙棒
と云

表

夕夕口徑六分

成家
所藏
頼阿
作
尺八

表

裏

卷

三ノ廿七

柴屋軒什物頓阿作乃尺八を宗長法師宇津山記不老
人と名付く吹出教とい無事ともうせ續みは志う
の尺八硯乃邊里を避を老人と云二字ハ約成乃季の
朗詠乃題乃中を南錄よと寫し押手乃穴の下不
入く侍里一管は山名霜臺携へ給ひ々々二管の
一あり頓阿作應仁乃亂了栲津國池田乃陣ふく他
田氏中後給ひ一或時酒乃中の戲り懸望さく去
年の春匠作今川修理大夫不氣りきく罷里登里ぬと

ある物か教應一山名霜臺とは彈正大弼持豊入道宗
令乃てあり宗令を頓阿没後三十二年ふ生也一人か
也は頓阿作と云傳中一く受る如ありか不
老人と銘あるは宗長より今川氏親朝臣へ承り
と云管か不
氏親朝臣ハ上総介義忠朝臣の長子 成家
あく傳ふる説を頓阿作ふく是利民部少輔所持の
處應仁乃亂了故ありく宗長乃て入り申あり是利
民部少輔と云人孝人處か一山名氏清より民部
少輔と稱をくは氏清頓阿より相傳きく氏清
亡ひく宗令入道乃て入りしにあか應三々
魚一抄尺八を唐ふく林鐘蕭と云る筈よりききは筒

音を黄鐘調り切て傳へたり黄鐘調ハこかちり林鐘
 乃官たり息鐘響鏡乃筒音ふる稀唐乃張文収ハ製
 き尺八短笛と唐書樂ソハも是なり呂ホリ製れる
 尺八十二枚と唐書呂云ハ十二律各一管ハ製る
 たる形り今現了日本了林鐘尺八と黄鐘尺八大和國
 法隆寺東大寺ハ一管ハ傳へたりとを傳へハ不依
 其詔ハ豐統後守統秋ハ傳ハス
 宋元明清朝乃人乃詳了もかち唐代之樂器を觀
 弄もかちを得るは百王一姓萬國了勝まハ依皇朝の
 神徳たふ云及た以慈覺大師尺八を吹ふハ一と
 懷良親王尺八を吹せりハ王頓阿法師等の愛敬せり
 吉野拾遺了尺也
 一餘興了よかと云へる形り

